



森本あんり著（新潮選書・1760円）

思想信条、人種や階層の違う他者を「敵」と名指しして、自らの「正義」を振りかざす不寛容な思考がまん延している。ヘイトスピーチ、移民排斥、そして米国のトランプ前大統領支持者らの「反乱」……。その

意志に反すると確信し、先住民が白人の信仰に敬意を払うことに共感した。植民地も「土地所有者」である先住民と「契約」して作るという当時では「対等」な姿勢を貫いた。

米国の植民地時代、17世紀に活躍したロジャー・ウィリアムズという人物を主人公に、寛容という価値がどう社会的に成長したかを論じる。

ウィリアムズの寛容の源流は、中世カトリックにある。異端審問と魔女狩りの時代は、イスラム教徒やユダヤ教徒と共存した時代でもあった。許しがたく異質な他者を排除で

ウィリアムズは、自身の築いた植民地で、世界初とされる政教分離を明文化した政治文書を作った。厳格なピューリタンであったがゆえに、むしろ、信仰の他者への強制は神の

きないからこそ寛容が必要だったという逆説。ところで「不寛容な一神教」と対比して「多神教的で寛容」とされる日本は、難民に厳しく死刑を存続させている国でもあるが。（生）